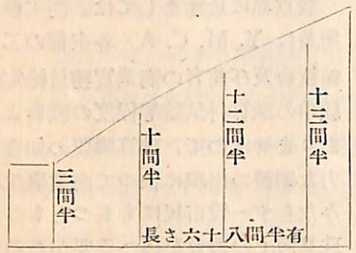
和算漫錄（九）

村林專之助

1、前號より續く　同書（毛利重能の算術書）の末に興味ある面積の測法がある。左に示す。



かくのごとく成田有、いく所にてもけんを打、一つにをき、そのかず程に又割、(a)是をき合て四十間有、又四つに割十間に成、長さ六十八間半をかけ六百八十五歩有、三にて割二段二畝二十五歩有。

いろ々々のなりども有、いづもれ四角成(b)やうに見つもり、いでたる所ひき、入たる所へもひきならし申候事せん(c)なり。

（說明）（a）「是」は卽ちの意ならん。（b）形等の意。（c）專卽ち肝要の意。

今日不規則なる邊を有する形の面積を求むるには測量家は「シンプソン」氏面積算法を用ゐる。上圖（原本の通り縮寫）の測法は其算法の精神に叶うものであるから、此書に此法が記してあることは大に注意すべき事である。算法統宗には測地上の問題圖形が澤山あるが此の方法は載つてゐない。されば此れは重能子の考へ出したのか、或は我國測地の術は王朝盛時の班田制度以來の長き歷史を有するものであるから、古代よりの傳法であるかとも思はれる。

最後の歌とも云ふべき所に「右はんぎにおこし世間に有之云兵、割

の次第廻遠にしてわけ難聞に付拙子知音富小路讃州寺町に市兵衛尉と申候仁所望候間、悉改作直右はんぎの分大形書付畢」云々とあるから、此書の出版以前に算書の刊行本があつたことは確かである。此文に於て最初に「右」とあるは本書全體の內容の謂である。又終りに改作直とあるから、「世間に有之」といふ其の刊行本は此書の初版らしく思はれる。（然し又それを惡ざまに云ふ所などの書き振りは他人の書らしくも見ゆ、或は數書ありしにや）×「割」とは計算の意ならん。以下數行略す

重能の算術書が我文化發達に貢獻したことは至大で有つたであらうが、如何せん、此等に付ては徵すべき材料が乏しいので知ることが出來ない。

毛利重能の算術書は前述の如く完本が發見されたが、生憎表紙が無くなつてゐて書名が分らぬ。但し算法童子問卷五の第五條中に「毛利重能歸除濫觴に見へたり」とあるから、重能の算術書は歸除濫觴といふ名であつたらしい。（或は割算の始めとでも云つたか。）然し一種であつたか數種出版されたか、は分らないが、普通に二種と想像されてゐる。（故澤田學士數學史より）

2、蜻　蛉

蜻蛉をとんぼと云。大阪にては、やんまと云。國によりて、ゑんぼんげざと云は、みな彌重羽の轉じ來れるものなりと、吳山が物類稱呼にくわしく出せり。なべて鳥蟲ともに翼は二ツのものなるに、やんまは四ツあるゆゑ、彌重羽といふを轉じてやんま、ゑんば、とんぼとなれり。按ずるに、翼の四ツあるもの、更に蜻蛉の外、山海經はしらず、眼前に見るものなし。其翼四ツあるは、元來水蟲變じて蜻蛉となるなり。よつて陰數の純陰を具足せり。其蜻蛉の形六ツ出にして、水の字の象形となること、これまた理の妙なり。（文化三年發行嗚呼矣草より拔萃、著者は大阪の儒者田宮仲宣なり）

干物の皺の乾かぬ九月かな　蟹　歩
二分咲いて一分こぼしぬ萩の花　梅　室